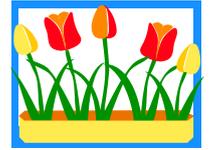




ダンボール箱で生ごみをリサイクルしてみませんか？



ダンボール箱を使っての生ごみの堆肥化レシピをご紹介します。
費用もあまりかからず一年を通して作る事ができます。ぜひ、お試しください。

用意するもの

★ダンボール箱

- みかん箱や引越し用などのダンボールを 1～2 個
(縦 30cm×横 45cm×高さ 30cm 程度)

★基材 (園芸店、ホームセンターで購入)

- ピートモス
- くん炭
- 箱の底に敷くダンボール (底の強度をあげる)
- 角材 (木片) 4個、またはビールケースなど。
(通気性を良くするため)
- シャベル (ダンボール内をかき混ぜる)
- 温度計 (生ごみ分解温度の確認用)



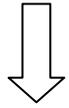
作り方

1. ダンボール箱を組み立てる。基材が出ないように隙間を
ガムテープ (布製がよい) でふさぎます。
薄い箱や冬場などは二重にするとよいです。
2. 箱の底にダンボールを一枚敷き、二重にします。
新聞紙を厚めに敷いてもよいと思います。
3. ダンボールなどでフタを作ります。
(保温、防虫、防臭のため)
4. 基材のピートモスとくん炭を、3対2 (15ℓと 10ℓ) の
割合でダンボールに入れ、よくかき混ぜます。
5. 雨のあたらない暖かい場所に角材 (木片) やビールケースを置き
(通気性を保つため) その上にダンボール箱をおきます。
6. 生ごみを三角コーナーなどで水切りをし、一日に約 500g 程度
入れて、全体をよくかき混ぜます。水分が多いときはひとしぼり
して入れましょう。シャベルでダンボール内を傷つけないように
気をつけてください。
7. 温度計を中心部に差し、温度の変化を見ます。



発酵について

- 開始してから2～3週間後には、基材の温度も20℃～30℃をこえるようになり、順調に発酵が進めば60℃まで上がる事もあります。冬場など湯気が立ち上がるのがみえます。
- ダンボール箱の全体から水分が発生しているの、直接地面に置いたりビニールなどかぶせないでください。
- 生ごみは、小さく切り刻むことで早く発酵分解します。



分解しやすいもの

- 野菜くず・りんごやみかんの皮・卵の殻（小さく砕いて）魚の骨（大きい物は砕いて）や内臓・茶がら・コーヒーかす・肉・食べ残し等。



分解しづらいもの

- 鳥や豚などの骨（入れない方がよい）しじみやあさりなどの貝殻（入れない方がよい）玉ねぎの皮（細かくする）スイカの皮など水分の多いもの（細かくして少しずつ入れる）とうもろこしの芯や皮（細かくする）



入れてはいけないもの

- 食用ラップ・アルミホイル・タバコの吸殻・木や枝など生ごみ以外のものは投入できません。腐敗したのもダメです。



温度について

- 温度が上がらないときは、米ぬか・てんかす・使用済み油などをいれると温度が上がります。
- 油類は入れすぎると臭くなります。（1回に200cc以下で頻繁に入れないようにしましょう）
- 冬場の気温が低いときは、ペットボトルに熱い湯を入れて（やけどをしないように）ダンボール箱の中に入れるとよいです。

臭いについて

- カビや土の臭いや発酵臭があります。
- 魚やイカの内臓などを入れると臭いがきつくなりますが2～3日かき混ぜればおさまってきます。
- 臭いが気になるときは、コーヒーかすやお茶がらを入れると緩和されます。

虫・カビについて

- 土に白いカビが発生しますが問題ありません。
- 温かくなるとコバエなどが発生しやすくなるので、バスタオルなどをかけるなど工夫してください。
- ダンボール内の温度が上がれば、虫なども発生しにくくなります。
- 虫が多く発生した場合は、ポリ袋に中身を移して密封し、日にあてると死んでしまいます。死んだ虫は、微生物が分解してくれます。



使用期間について

- 1日の生ごみの投入量が約500g程度だと、3～4ヶ月位は処理できます。
- 3～4ヶ月位続けると、生ごみを入れても温度が上がらなくなり、表面に粘りけがでて、べたついた状態になったら終了のサインです。
- 終了後は同量の土と混ぜて、1ヶ月ほど熟成させてから堆肥として使用できます。
- 栄養価の高い堆肥なので、家庭菜園や花壇などに使用できます。



色々工夫してみましよう！



底を二重にする



ダンボールを二重にする



フタを作る



バスタオル・フタで二重にする



ダンボール、ガムテープの芯等で足を作る



ダンボールの底に足を付ける